

クラブで得た事

藤原芽子

クラブに入つた動機といへば、人数が足りないと云う事からである。最初はなれぬ重労働に涙も流れ、本当にやめようと思つた時は幾度もあつた。でも皆の友情に支えられて、その危殆を乗り越え今日にまで及んだ。その間に於ける私の経験は本当に貴重なものだ。高校生としての経験から人間問題まで考へるようになった。そうしてその経験を述べる事にしよう。

誰しもが感じる試合のカー印象として、自分の力の限界というものを目の前で示されたい。自分がどんなに未熟で人並に及ばない事が、そうしてもっと練習しなければならぬという事である。あやふやな気持ちでいてはだめだ、もつとしっかりとしなくては、……、その日から私はハンドボールマンになつたのである。

又、今までの試合に於ては、チームには信頼しあうという事が最も大切だという事だ。信頼しあうところにチームが一つと成り、又個々のプレーも、充分にそのものが発揮できるようになるのだ。そう知つた私達のチームは、今でも大きくなつたりとな

つていると私は思う。一才、クラブ内部に於ては友達の有難さ、という点に身をもつて感じ得た。それほど度シヤンアシユートができた。その日に、私は加うズで足を切った。その時の皆の態度は、私の方が気の毒に思つてほどやうな感じだ。その時ほどクラブに入つていようれしさといふものを痛切に感じ事はなかつた。それによつて友情とはこんなものだなあと知つた。

以上は、私のクラブ生活二年に於て得た私にとつての最大の経験である。こういうこともハンドボールクラブ内の歴史の中の依拠を流れている一つとして記す。

卒業にあたって

佐藤順子

中学時代、いろいろなクラブに入り少しづつつかじつてきたせいか卒業してしまふと何をやって来たのかさっぱりピンと来ません。運動クラブでは卓球、文化クラブではコーラス部が深く印象に残っている位です。クラブに熱中しなかつたから勉強を一生懸命したのかと思われすが、そんな覚えもななく一瞬のうちには中学時代をすごしてしまいました。